

Title	幕末知識人の西欧認識：佐久間象山と福沢諭吉を中心として(1)
Sub Title	The observation on western civilization by the intelligent people in the last period of Tokugawa era : Zozan Sakuma and Yukichi Fukuzawa
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1984
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.77, No.1 (1984. 4) ,p.1- 17
JaLC DOI	10.14991/001.19840401-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19840401-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19840401-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 幕末知識人の西欧認識

——佐久間象山と福沢諭吉を中心として——(1)

飯 田 鼎

- (一) はしがき——幕末の思想状況
  - (二) 佐久間象山の西欧認識
  - (三) 福沢諭吉との比較
- 以下続号

(一)

1638年(寛永15年)鳥原の乱終熄、そして翌39年、幕府はポルトガル船の日本への渡航を禁止する措置によって鎖国は最終的に完成した。西欧列強の東アジアへの進出は、1840年阿片戦争によって決定的なものとなったが、わが国に実質的にその影響が及ぶのは1850年代、嘉永年間であり、いわゆる幕末とは、嘉永元年(1848年)、外国船が頻りに対島、五島列島、蝦夷および陸奥沿岸に出没するに至ったこの時期からはじまるといっても間違いではなかろう。時あたかも、ヨーロッパにおいては、フランス二月革命がおこり、先進諸国を震撼しつつあると同時に、すでに青年期の市民社会を脅かすに足る革命的政党の生誕を告知する『共産党宣言』が発せられた時期にあたっている。その意味で、ヨーロッパ市民社会の荒々しくもまた興奮を伴う変革の嵐の余波は、中国大陸を超えて遙かな日本の岸辺をも洗っていたのである。それでは何故に、ほかならぬこの1840年代に、ヨーロッパ列強は、より大規模にあるいはより組織的にアジアの天地に迫り来ったのであろうか。何よりもまず考えなければならないのは、産業革命の衝撃である。

産業革命の結果は、蒸気機関の生産体系への応用によって、機械制大工業をもたらし、大規模生産の産出する工業生産物は、世界各地に販路と市場を求め、これらの製品を運搬するための交通運輸手段の変革となってあらわれるのは当然である。資本主義の決定的な前提条件としての世界市場は、1848年よりはるか以前に形成されていたが、19世紀前半から後半にかけてのこの時期に、ヨーロッパ先進諸国における幹線鉄道網の整備発達と蒸気船の普及によって、地球上かつてない規模に拡大され、インドはいうまでもなく、広漠たる中国大陸もまたヨーロッパ列国による通商政策の射程内に入り、阿片戦争はその象徴であった。<sup>(1)</sup>かくして1850年代に入るや、わが日本の伝統的な鎖国政策

注(1) この問題については、E. J. Hobsbawm, *The Age of Capital, 1848—1875*, London, 1975, 柳父附近・長野聰・

もまた、このような外圧によって抛棄することを不可避に要請され、広大な世界市場に組み入れられることとなり、この外圧に対してどのように対処するか、支配層としての武士階級に限定されたとはいえ、国家的な次元での死活問題として提示されたのであった。幕末とは、たんに明治維新前、崩壊に頻する幕藩体制の危機的段階を意味するにとどまらず、また今日われわれがとすればおちいりがちなように、幕末が明治変革を当然に予定していたかのような幻想によって彩られた時期でもなく、まさにこれとは逆に、わが国が西欧列強の圧迫に抗して、国民国家として生き抜くために、まず「己れを知り」、そしてさらに「敵を識る」ために先駆的な知識人たちが苦闘し懊悩した時期であった。<sup>(2)</sup> 「己れ」としての日本とは何か、しかも肉迫しつつある敵手としてのヨーロッパとは一体何者であるか、幕末動乱の深層には、底知れぬ力をもった未知の敵にどのように立ち向うか、この重大な問題についてのさまざまな認識が渦まき、これについて、徹底的に争論し、考え抜くことが不可避に要請され、そのために多次元での葛藤、たとえば、「開国か攘夷か」をめぐる諸勢力の角逐が、まことに想わざる諸結果を孕みつつ進展していった非情な時代であったと言えよう。幕末志士のスローガンともいべき「尊王攘夷」の思想とは、極東に偏在する一小王国を、世界に冠たる王統連綿たる文明国として誇称する反面、ヨーロッパ諸国を夷狄、すなわち野蛮国として位置づける儒教的伝統的解釈が根強く浸透しているのであり、しかもその夷狄観たるや、それによって必ずしも未開化、未教化の国を意味するのではなく、儒教的文明とは相容れない異質の、すなわち同化不能でしかも硬質の文化を含意するところに、幕末日本の知識人の苦悶があった。そこでここでは、嘉永年間から幕府倒壊期にかけての知識人の西欧認識を、佐久間象山と福沢諭吉を軸として考察してみたい。

福沢と佐久間を選んだ理由とは、その時代や世界観の相違にもかかわらず、時勢にかんする共通の認識と思想的には系譜関係とも思われる脈絡が発見され、また、きわ立った対照性がみられ、この二人に関連する人物像をも浮き立たせることを通じて、幕末知識人の西欧認識を、よりひろく理解することができると思ったからである。

(二)

佐久間象山と福沢諭吉には、幕末と維新を狭んで、きわめて興味ある連関性と対照性がみられる。福沢をよく理解するためには、幕末思想家のなかでも卓越した佐久間を把握することが必要であり、また佐久間の、幕末における思想家としての地位を明らかにするためには、彼の西欧認識を、福沢

荒関めぐみ訳『資本の時代』1848—1875, I, みすず書房, 1881. が示唆的である。

(2) この点にかんして、片岡啓治『幕末の精神——日本近代史の逆説』日本評論社, 1979, がきわめて問題提起的で且つ説得力に富む。

### 幕末知識人の西欧認識

の豊かなアメリカでの見聞およびヨーロッパ体験の鏡に映してみることは、この時期の日本思想史の深淵を探求するために不可欠な作業である。以上のような視点から眺めるとき、この両者には一体どのような関連が認められるであろうか。

福沢諭吉は、安政3年(1856年)蘭学修業を志し、故郷中津を去るに際し、藩当局に蘭学修業を理由として申請したところ、砲術修業と改めるように忠告されたことをつぎのように、『福翁自伝』に記している。一寸長いが引用してみよう。

夫れから私は兼て母との相談が済んで居るから、叔父にも叔母にも相談は要りはしない。出抜けに蘭学の修業に参りたいと願書を出す、懇意な其筋の人が内に知らせて呉れるに、「それはイケない。蘭学修業と云ふことは御家に先例のない事だ」と云ふ。「そんなら如何すれば宜いか」と尋ねれば、「左様さ。砲術修業と書いたならば済むだろう」と云ふ。「けれども緒方と云へば大阪の開業医師だ。お医者様の処に鉄砲を習ひに行くと云ふのは、世の中に余り例のないことのように思はれる。是れこそ却て不都合な話でござらぬか」「イヤ、それは何としても御例のない事は仕方がない。事実相違しても宜しいから、矢張り砲術修業でなければ済まぬ」と云ふから、「エー宜しい。如何でも為ませう」と云て、ソレカラ私儀大阪緒方洪庵の許に砲術修業に罷越したい云々と願書を出して聞済きんせきになって、大阪に出ることになった。大抵當時の世の中の塩梅式あんばいしきが分るであらう、と云ふのは是れは必ずしも中津一藩に限らず、日本国中悉く漢学の世の中で、西洋流など云ふことは仮初かりそめにも適用しない。俗に云ふ鼻摘はなつまみの世の中に、唯ペルリ渡来的一条が人心を動かして、砲術だけは西洋流儀にしなければならぬと、云はば一線(3)の血路が開けて、ソコで砲術修業の願書で穩(3)に事が済んだのです。

ここに、砲術だけが西洋流という、「一線の血路」が開けていたと、福沢がのべているのは味わうべきである。中津藩は、我が国蘭学史上、重要な意義を担っていたが、その影響がどうか、明確ではないが、佐久間象山が、この藩の砲術師範であった事実(5)がある。そこで、福沢が上士で且つ砲術に関心があったとすれば、蘭学修業の上で象山と会うことは必然的であったと考えられるが、彼は蘭学そのものに関心があり、これを通じて未だ見ぬヨーロッパへの憧憬が強く働いていたとみられるので、この両者は結局顔を合わせることなくして終わった。

福沢は天保5年(1835年)生まれであるが、佐久間は、文化8年(1811年)、信州松代藩士佐久間一学の子として生まれた。25年の年齢的差異からすれば、二人は同時代人というにはやや無理が伴う。しかし文久年間には、青年期の福沢は壮年の潑刺たる象山と共通の時代環境のなかにいるので

注(3) 『福翁自伝』、岩波文庫版、57—58頁参照。

(4) 慶應義塾編『慶應義塾百年史』上巻、1958、第一章草創期の慶應義塾、中津藩の蘭学研究(46頁以下)参照。

(5) 前掲『百年史』は、砲術師範佐久間象山と中津藩との関係について、つぎのように伝えている。「嘉永三年(1850)七月に、中津藩のおもだった者十四名が一時に象山の門に入り、さらには象山に出張教授をうけ、藩を挙げて象山の砲術を習学するといった熱心さであった。」(上掲、53頁)。

ある。五両五人扶持という家録からみれば、佐久間家もまた福沢家と同じく下層武士家族であった。福沢とは年齢の開きがあったばかりでなく、また江戸に比較的近い信州と遼遠の地中津とでは社会的環境をいちじるしく異にするにもかかわらず、漢学的教養を基礎に、蘭学学習への熾烈な意欲を燃やし、やがて一世を指導する思想家に成長した点では、幕末と明治という時代的差異を超えて、その精神的役割の点で、多分に共通する面をもっている。

佐久間と福沢との関係を、洋学およびこれを媒介とするヨーロッパ認識という観点から比較考察すれば、佐久間が黒川良安について蘭学の学習を始めたのは弘化元年（1844年）彼が33歳のときであった。福沢はそれから10年後、安政元年（1854年）、兄三之助の奨めに従い、長崎に赴いて蘭学を学ぶのであるが、この両者が日本の対外政策について次第に深刻な憂慮を抱き、同時代人のなかでもきわだった見識の高さを示すのは、日米修好条約が、勅許を得ることなく大老井伊直弼によって調印され、これに反対するいわゆる尊王激派にたいする弾圧、安政の大獄が開始された頃と一致する。象山の同時代人としての時期に活躍した思想家は多いが、対西欧認識という点で無視することのできないのは、渡辺崋山、高野長英、横井小楠、橋本左内の4名であろう。崋山は、その『西洋事情』および『外国事情書』などによって、福沢の思想的先導者とも思われる天才的な着想を示しており、彼自身は蘭文を解読せず、その西欧理解は高野長英に負うところが多かったとはいえ、その思想は深く、その諸著作は、江川英竜を通じて象山にも影響をあたえたと思われる。

横井小楠は、蘭学よりはむしろ林家を中心とする幕府の正統的な儒学、朱子学の流派に棹さし、天保10年、江戸に遊学、林家に入門、このとき、佐藤一斉、松崎謙堂、藤田東湖等と相識ったという。彼の思想を、尊王攘夷から開国に転ぜしめたものは、安政2年（1855年）林則除によってまとめられた『海国図誌』を読んだことによるといわれている。やがて彼は、安政5年、越前福井藩から招聘され、富国・強兵・土道の大綱とする「<sup>(6)</sup>國是三論」を発表し、卓越した海外認識を提示するのである。また橋本左内は、福井藩生き抜きの経綸家として小楠に師事し、福沢も学んだ適塾の出身で、主君松平慶永を助けて一橋慶喜の將軍継嗣問題と日米修好条約の勅許問題に画策、安政の大獄により刑死したが、彼の意志は、小楠によってうけつがれる形となった。小楠は象山より2年早く文化6年、熊本藩の生まれで、父大平は、150石取りの上士であった。橋本左内は、天保5年生まれであるから、福沢と同年、父は福井藩の藩医で25石5人扶持であったが、福沢や佐久間ほどではないにしても下士待遇であったと言っても間違っていないであろう。

このように、対外認識をめぐって幕末を代表する6名の思想家をあげて、その出生年代および出身を辿っていくと、福沢論吉と橋本左内は、まったくの同時代人で（吉田松陰も天保元年〔1830年〕生まれであるから、対外認識の鋭さという点では、福沢や橋本等と共通したものをもっていたといっても過言

注（6）「國是三論」の成立過程については、高木不二氏の論稿「幕末期越前藩藩政改革路線に関する一考察——横井小楠『國是三論』をめぐって」（『三田学会雑誌』、第75巻第3号〔1982年6月〕）が興味深い。

### 幕末知識人の西欧認識

ではなからう)、1793年生まれという崑山を別とすれば、長英、象山、そして小楠は同時代人であり、とりわけ小楠は象山にたいしてある種の批判をもっていた。そこでおよそ二つの同時代人のグループに分けられるこれらの思想家群について、その対外認識、西欧列強にたいするその姿勢を福沢と佐久間を基軸としてうかがうことによって、幕末知識人の危機意識の本質を探ろうとするものである。

象山と福沢とを、日本の危機を焦点として時代的に重ね合わせてみれば、安政5年(1858年)10月、福沢が藩の命令により、築地鉄砲洲に蘭学塾を開いたその年の4月、象山は、梁川星巖に密書を送り、公武合体を画策すると同時に、ハリスとの折衝について、その案を幕府に献策しようとしていた。

嘉永7年(1854年)1月16日、軍艦7隻を率いて神奈川沖に碇泊したペリーの圧力に屈服した幕府は、日米和親条約、いわゆる神奈川条約を勅許を待たずに締結し、下田・箱館二港を開き、ややおくれてこの年3月23日、ロシアの提督プチャーチンが長崎に来航、樺太国境の確定ならびに通商にかんするロシア政府の覚書を手交した。そしてこの頃、吉田松陰は、下田で米艦に近づき密航を企てて失敗、このとき彼が所持していた激励の詩文から、佐久間象山は4月23日、逮捕投獄された。やがて松代で蟄居するよう命ぜられたが、このとき書き綴ったものが省魯録である。「省魯」とは過誤を反省するという意味であるが、おそらく、政治犯として彼が藩侯に迷惑を被らしめたということであろうか。

この稿は、その生前に知られなかったが、その死後明治4年勝海舟の妹順子が象山に嫁いでいたところから、勝の手により公けにされたもので、このなかにすでに象山の独自のヨーロッパ認識がみられる。

「去夏<sup>めいげん</sup>弥利堅<sup>にわ</sup>の船突かに至りて、江都戒嚴せしとき、予、藩邸の為に軍務を經理し、<sup>おひ</sup>睡ることを得ざるもの七昼夜なりしも、精神ますます奮ひぬ。今歳罪を得て獄に下り、<sup>そし</sup>麩食を<sup>くら</sup>飯ひ塩を噛み、重囚と伍をなすこと数旬なりしも、<sup>てんぜん</sup>恬然としてこれに安んじ、精神活発にして、身もまた健康なり。……」。

囹圄にある身としてはまことに意気軒昂たるものがあるが、それにもかかわらず、幕府の海防策の杜撰を想い、切齒扼腕の態であったことが察せられる。「外夷をして易侮の心を開かしめざるは、これ防禦の至要なり。辺海<sup>べうと</sup>の防堵は、みなその法を得ず。<sup>つら</sup>陳ぬるところの銃器は、みなその式<sup>あた</sup>に中らず。接するところの官吏は、みな凡夫庸人にして、胸に甲兵なし。かくの如くにして、夷人の侮心を開くことなからんことを欲するも寧<sup>いづく</sup>んぞ得<sup>(8)</sup>べけんや」。

現在将師の任にあたる者は王侯貴族か、あるいは、平常は飲食歌舞をもってその娯楽と考え、国家の防備などにはまったく無関心である人々が、果してよくその任に耐えるとは到底考えられない

注(7) 佐久間象山『省魯録』、『渡辺崑山・高野長英・横井小楠・橋本左内』、日本思想大系55、岩波書店、242頁。

(8) 上掲書、246頁。

というのである。このような象山の危機意識は、一体、何によってたかめられ、砲術を中心とする西洋流の軍備の充実を高唱させるに至ったのであろうか。おそらく、すでに前藩主真田幸貫が、天保12年(1841年)6月から弘化元年(1844年)5月まで老中の地位にあり、この間、天保13年夏より海防係を拝命していたとき、海外事情探索の内意をうけていた象山は、「海防にかんする藩主宛上書」を建白し、このなかで、イギリスを中心とする西欧列強の脅威を説き、とくに1840年から42年にかけてのアヘン戦争に清国が敗北し、屈辱的な講和を強制されたことの重大性を認識して以来のことであると思われる。

「御上にも海防御掛仰せ蒙被れ候御事は、定て去る<sup>いとし</sup>亥年以來イギリス夷、唐山と乱を構へ、頻に戦争に及び候趣、風聞も仕候義に付、遠く御思慮を運らされ、万一の義御座候節、諸方狼狽之無き様御手配御座候義と存じ奉候。……まして此節のイギリスに於ては、その<sup>しやうけつぎやうかん</sup>猖獗兇悻、虐を隔海の諸国に逞く仕候事、此度唐山と戦争に及び候事……。

当二月<sup>おらんた</sup>阿蘭陀人より書付申上候始末、近日伝聞仕候へば、唐山<sup>しきり</sup>頻に利を失い、福建・寧波<sup>にんぽう</sup>等の地方既にイギリスの為に陥没仕候よし、且又先年イギリス船本邦の漂流人七人を送り戻し候為め、豆州海岸に近寄り候を、鉄砲を以て御打払に相成候に付、右之船漂流人を広東の<sup>まか</sup>阿媽港へ連れ戻し罷在候処、右七人の内一人病死仕り、二人は此節唐山を騒し候手勢に相加り、其余四人阿媽港に罷在候所、其者共より本国之義を心遣ひ、書簡を以て、イギリスの事情を長崎表迄送り候よし、其書簡を認め之有候には、イギリス人此度唐山と戦争<sup>かたづき</sup>方付次第、本邦に交易を願ひ、万一交易御免之無き節は、先年漂流人送戻しの為め海岸に乗り寄せ候船へ、理不尽に鉄砲を打掛け<sup>わけあい</sup>被候<sup>ただ</sup>誤合を御糾し申度よしを、イギリス人申居候由、又阿蘭陀下輩の者申渡し候義を承り伝え候へば、唐山之騒乱方付次第、長崎・薩摩・江戸三ヶ所へ兵艦を差向け候様、イギリス人申居り候よし、此の如きの類尚種々御座有る可く候へ共、自余之儀は承りも仕らず、暫く伝聞仕候為三事を以て、愚考仕り候に、本邦へ対しイギリス夷の野心を懐き罷在り候事は、<sup>(9)</sup>実に相違之無き義と存じ奉り候」。

ここで注目すべきことは、象山が、天保8年、日本人漂流民7名をおくり、浦賀に来航して交易を求めた英国軍艦モリソン号にたいし、幕府がこれを拒絶したばかりか、砲撃を加えた事実の重大性を指摘し、強大なイギリスがわが国にたいし報復的行動に出るのであろうという予測をたてているであろう。問題は、幕府がこの切迫しつつある状況にたいして何ら有効な措置を講ずるのでもなく、無為無策であるという現状を憂え、彼はすでに「海防八策」を藩主に提出し、これについて同じ時期、天保13年10月9日、加藤永谷宛の書簡において、「右に付、拙者にも海防の八策を設け候て、内々寡君へ差出し候事<sup>(10)</sup>に之有り候」とのべている。この「海防八策」は、象山の西欧認識を窺

注(9)「海防に関する藩主宛上書」(天保13年11月24日)、上掲書、262—263頁。

(10) 加藤永谷宛書簡(天保13年10月9日)前掲書、328頁。

う意味できわめて興味深い。

其一、諸国海岸要害之所、嚴重に砲台を築き、平常大砲を構え置き、緩急の事に応じ候様仕度候事。

其二、阿蘭陀交易に差し違わされ候事、暫く御停止に相成、右之銅を以、西洋製に倣ひ数百千門之大砲を鑄立、諸方に御分配之有度候事。

其三、西洋の製に倣ひ堅固の大船を作り、江戸御廻米に難波船之無き様仕度候事。

其四、海運御取締りの義、御人選を以て仰せつけられ、異国人と通商は勿論、海上万端之<sup>かんかつ</sup>奸猾、<sup>きびしく</sup> <sup>ただし</sup>敵敷御糾御座有り候事。

其五、洋製に倣ひ戦艦を造り、専ら水軍の<sup>かけひき</sup>駆引を習はせ申度き事。

其六、辺鄙の浦々里々に至り候迄、学校を興し教化を盛に仕り、愚夫愚婦迄も、忠孝節義を弁へ候様仕り度候事。

其七 御賞罰弥明に御威恩益々<sup>いよいよ</sup>顯れ民心<sup>いよいよ</sup>團結仕り候様仕度候事。

其八、貢士之法起申度候事。

以上の八策のうち、もっとも重要且つ緊急なものは、其二と其三、すなわち、西洋式の火器の製作および軍艦の建造とこれにともなう海軍の充実であるというのだが、象山の海防論の特徴的なことは、これを実施するための技術および費用調達についてもその独特の見解を披露していることである。其三に、「異人と通商は勿論、海上万端之奸猾、敵敷御糾し御座有候事」とあるように、象山は、一般庶民の外国人との接触はもちろん、オランダを除いては幕府が国交を開くことさえ抑止的であることが推察される。だとすれば、「西洋製之戦艦御造立」といい、「何卒早く戦艦之義に御取掛在らせ被れ候様」と訴えても、その技術や職人をどうするのであろうか。ひとつには、西洋艦船建造のための書物はすでに渡来していて、本邦の職人でも、「大抵には出来仕る可く候へども」として楽観的である。ただペートル大帝の例を考え、はじめて西洋式の軍艦を建造するのは、「相応の材木に差支へ工匠も事慣れず、一艘にも多分の費掛り候ひし様子」であるから、オランダより戦艦20艘程を購入することの得策であることを訴えている。興味深いことに、当時、幕末知識人は、ナポレオンとならんで、専制的絶対主義的君主ペートルを理想化する傾向が強く、象山は、嘉永6年6月29日付、門人で大垣藩士小寺常之助に宛てた書簡のなかで、つぎのようにのべている。

不<sup>よ</sup>倣<sup>かい</sup>の世話を致し候中津藩調練人数の内、其上等なるは、カリホルニア人の総体よりは、稍優り候との事に御座候。左候へば、果して荀子も人を欺かず、と存候事に御座候。ロシアの主ペートルが、和蘭人を師として、遂に和蘭に劣らず、北アメリカ人、英吉利を師として、終に英吉利に勝ち候類は、御承知之無き候義や。<sup>(11)</sup>

象山が中津藩砲術師範を勤めたことはさきにふれたが、この書簡が書かれた嘉永6年(1853)は、

注(11) 小寺常之助宛書簡(嘉永6年6月29日)、上掲書、347頁。



丁度福沢が、兄三之助の勧めにより、この年の2月、長崎に出て蘭学を学ぶべく、同藩の家老の息子奥平耆岐を頼りつつ、桶屋町光永寺の食客となり、やがて大井手町砲術家山本物次郎の食客となった頃である。福沢は、砲術志願という名目で、やがて緒方塾に入ることになるが、それはともかく、象山が、中津藩の砲術門下生のうち、「其上等なるは、カリホルニア人の総体よりは、稍優り候」と自画自賛しているのが注目をひく。このように象山と福沢とは、中津藩を媒介にして、あるいは蘭学を通じて結びつきそうなものだが結びつかず、彼らのヨーロッパ認識にそれぞれある種の陰影を投げ合うことになるのである。

軍艦20艘をオランダから買い上げるとして、普通の戦艦は、一艘大体五千両程度であり、拾万両がその入費ということになる。それではこの膨大な費用をどのようにして調達するか、これについて彼は傾聴に値する論策を提示する。

「扱て又、西洋製の大船だに御しつらひに相成候はゞ、<sup>き</sup>前きの八策にも申上げ候通り、江戸御廻米に難破船之無く、且つ又、天下の大利を興し候て、蘭人召し呼ば被、戦艦・火器等御造立御座御失出費をも、暫時に取返し候趣法之有<sup>(12)</sup>り候」。

象山はつぎのように計算をする。すなわち、最近、天下の難破船多く、「年により候ては、下の関より仙台迄の間、千八百余艘に及候事も御座候よし、当年<sup>など</sup>杯も<sup>しか</sup>駈と仕候義は<sup>つまびら</sup>審かならず候へども、冬の初め迄に天下の難破船四、五百艘も御座候ひし由に承候」。

〔象山の言うところが、どれほど客観的であったかは不明であるが、少なくとも、国富の莫大な量が、原始的な航海術と小型船による海上航行によって失われたことは疑いえない。「難破船だに之無く候へば、海運程利の大なるものは之無く候。左候へば、右堅固之船を以、海上にて奸猾之無様御<sup>しまり</sup>締を付け被れ候はゞ、最初申上候通、海防御入料程の義は、遠からずして御取返しに相成り申す可くと存じ奉候」。<sup>(13)</sup>いま仮りに五百石積みの船四百艘が難破したとした場合、一艘の価格を五百両として貳拾万両の損失となる。しかし積入れた荷物の価値を四万両として計算した場合、二四万両であって、「この貳拾四万両御座候へば、洪大の御利益に相成申す可候」という。つまりオランダ仕込みの西洋式軍艦を購入する費用を、日本は毎年海底に失っているのであって、船舶を近代化し、西洋式軍艦を以てすれば、難破船は少なくなり、従って軍備の増強にも役立つというのである。

象山の攘夷思想のなかで、強烈に意識されているのはイギリスであり、ロシアではない。「畢竟イギリスの本邦を<sup>きつ</sup>闖闖仕り候も、本邦の水軍に習はず、近来西洋にて盛に用ひ候神妙の火器を不心得に候を、見込候ての事に御座候……」、そこで水軍や火器を専ら西洋流にして兵員を充分に訓練するならば、敵も武備の嚴重なことを知っておどろき、自然とわが国を侵略しようとする野心を失うであろうと言う。

注(12)「海防に関する藩主宛上書」、上掲書、275頁。

(13) 上掲、「上書」、上掲書、277頁。

### 幕末知識人の西欧認識

象山は、この天保13年の時点では、伝統的な鎖国政策の固持を前提としており、軍備の充実の達成の後には、夷狄もわが道理に服するであろうという、きわめて楽観的な見解に立ち、もし従わなければ打ち払うべきであると主張する。

若し又、夷人冥頑無知にして畏るべきを畏れず、兵を引て交易を要し候等の義御座候とも、右之策御取用ひに相成、御武備御整ひ候上は、兵法に所謂『不敗之地に立つ』と申ものに御座候得ば、最早少しも臆すべき義之無く、如何様とも正辞を以て願筋御拒絶御座有り度く、且つ、兵船を我近海に近づけ其願いを為す状、無礼の段敵敷御叱り御座候はゞ、如何程無恥之夷狄に候とも、必ず心に凜然と恐れ忸然として愧入候場御座有る可く候。……彼れを退け候程の武備、既に我に御座候上は、本邦の国法、長崎表之外総じて異国之船近寄候事を許さず、近寄候をば手痛く打払ひ候が、国初よりの御作法也、と御答御座候はんに、何の御遠慮も御座有る間敷候。<sup>(14)</sup>

以上によって、象山のヨーロッパ認識は、天保13年(1842年)の段階では、アヘン戦争における清国の敗北とイギリスの脅威、これにたいして、西洋式の軍備、とりわけ軍艦建造の急務、そしてこれを実行するための訓練および航海術の学習が叫ばれているが、注目すべきことは、彼が蘭学を通じての西洋文明の摂取にきわめて積極的でありながら、国交の樹立、すなわち外国との交易のための開港にはきわめて消極的であったことで、晩年の「時政に関する幕府宛上書稿」(文久2年)に至るまで終始一貫しているように思われる。

象山が、天保から文久年間にかけての思想家のなかで、もっとも卓越していたのは、明確なナショナリズムの認識が、海防の強化も、具体的には砲術の研究と実戦的な訓練への熾烈な関心、蘭学を通じての西洋の技術の導入策に支えられて、民族の独立という高い次元に到達していたことである。その場合、オランダに学び、ロシアを範とし、イギリスに対抗するという姿勢がいちじらしい光彩を帯びた論調としてあらわれてくる。彼の場合、「東洋之道德、西洋之芸術」というとき、この芸術というのは、いわゆる art を意味するよりは、ひろく学芸、つまり、自然科学をはじめとする学問および技術を指すのであった。

まず貿易について、イギリスを対象として象山がその見解をのべているところによれば、<sup>そもそも</sup>「抑彼国は唯利にのみ走り候習俗に之有り候へば、仮令本邦に深く讎怨之有り候とも、本邦を乱妨仕候為めのみに<sup>わがわが</sup>態々兵艦をしつらひ、<sup>あまた</sup>数多の入費を掛候て、差向ひ候等の事は決して仕るまじく<sup>(15)</sup>候」。これによれば、イギリス人の念頭にあるものは、ただ貿易上の利益のみで、このことを度外視してわが国を攻撃するような不合理なことは考えられない。従って開国を要求し、もし聴き入れられなければ、どのようなことになるかわからぬという。

注(14) 上掲、「上書」、上掲書、272—273頁。

(15) 上掲、「上書」、上掲書、264頁。

「然る所、此度は既に唐山迄多くの軍艦差出し之有り、兵卒にも乏しからず、器械も備り候て、本邦とは僅かの海路を隔て候のみの事に候へば、先年豆州浦の一件御座候を幸に、事の序にその兵声を鳴らし、手を濡らさず交易を叶へ、若又其願筋取上之無き節は、本より事の序にて失費も薄き事に候へば、其尽兵を構へ本邦を悩し、遂に要して交易を始め、本邦の利を納し候べき料見に之有る可く候。元来道德仁義を弁へぬ夷狄の事にて、唯利にのみかしこく候へば、一旦兵乱を構へ候方、始終己れの利潤に相成申す可しと見込候はゞ、聊か我に怨みなくとも、如何様の暴虐をも仕る可く候へば、此方にては其怒のなき所を待みには出来かね候義と存じ奉り候」<sup>(16)</sup>。

ただ利益のみを追求するイギリス人なるが故に、わが国に深い怨恨があるにしても、ただそれだけでわが国を攻撃するはずはない。ただ武力をもって清国を屈服させた余勢をかつて本邦におしよせることはあるだろうという。注目すべきことは、象山のイギリスの自由貿易主義政策への批判である。「利潤に相成り申す可き」見込があれば、どのような暴虐をも加えることもありうる主張する。イギリスは、その軍艦をもって、日本の近海で捕鯨活動を行い、わが海運を妨害する一方、近隣の国と交易を行うことによって、本国にその経済的負担を転嫁することなく、長年月にわたって、わが国の植民地化を企図している。一旦イギリスに交易を許せば、ロシアも黙っておらず、開国を迫られることになることを憂えているが、象山は、この交易について、「又イギリスと交易相開け候はば、天下有用の品を以て、ますます外国無用の品と取換え候次第にて、天下之御大計に御座有る間敷存じ奉り候」<sup>(17)</sup>と、否定的な態度を明らかにしている点は興味深い。

以上のように、天保13年(1842年)の段階において、象山のヨーロッパ認識の特徴は明らかであるが、この認識は、その後、象山の海外についての知識の深まりと、わが国をとりまく国際状況の変化によって、次第に変化あるいは修正を余儀なくされたと思われる形跡がみられる。すなわち彼は、それから7年ほどたった嘉永2年(1848年)2月、「ハルマ出版に関する藩主宛上書」を草している。ハルマとは、オランダのフアンソア＝ハルマ刊行の『蘭仏辞書』をもとにして作成された蘭和辞書である。1803年(享和3年)から17年間の長きに亘って長崎のオランダ商館長として活躍したゾーフ(Hendrik Doeff)と長崎のオランダ語通詞らの協力により、1833年(天保4年)『ゾーフ・ハルマ』として完成をみた。福沢諭吉も、その自伝のなかで、緒方塾のなかのゾーフ部屋について生き生きとした叙述を展開しているが、象山が黒川良安について蘭学を学びはじめたのは弘化元年(1844年)のことであるから、それから5年経って、彼の蘭学もいちじるしい進境にあったと思われる時期である。このなかで、従来の夷狄観を修正するような見解を吐露していることである。

「扱又、<sup>さてまた</sup>当今の世の如く、五大洲一統きになり候様の事、開闢以来未曾有の事に御座候と申

注(16) 上掲、「上書」, 上掲書, 264—264頁。

(17) 上掲、「上書」, 上掲書, 266頁。

### 幕末知識人の西欧認識

内、西洋諸国學術を精研し、国力を強盛にし、頻に勢を得候て、周公・孔子の国迄も是が為に打掠められ候事、抑何の故と思召被候や。

畢竟彼の学ぶ所は其要を得、是の学ぶ所は其の要を得ず、高遠空疎の談に溺れ、訓詁・考証の末に流れ候て、……惟只顧己の国のみよき事に心得、外国といえはひたもの輕視し候て、夷狄蛮貊と賤しめ、彼の実事に熟練し、国力をも興し、兵力をも盛にし、火技に妙に、航海に巧なる事、遙かに自国の上に出でたるを知らず居候故に、一旦イギリスと乱を構ふるに及で、大敗を引出し、恥辱を全世界に貽し、大に古昔聖賢の体面を破り候事に御座候<sup>(18)</sup>。

ここには、「海防に関する藩主宛上書」にみられる戦闘的且つ樂觀的論調は消え失せ、夷狄=西洋諸国が學術を精研し、国力を強盛した文明国であるという認識を通じて、刻々日本に迫りつつある危機を訴え、敵を知ることの必要が力説されている。まさに福沢諭吉の西欧認識の先駆者たるの感がある。「惟々初段に申上候当今外寇に備え候の急務は、彼を知るより先なるはなく、彼を知るの方法は、彼の技術を尽すより要なるはなく、彼の技術を尽し候には、天下に其学の階梯なる詞書を梓行するより便なるはなし……。」

象山はさすがに「夷狄」の本質を洞察する明敏さを備えていた。嘉永6年(1853年)以前にすでに、日本の独立が失われることについて深い危惧の念を抱き、一国独の真締は、世界の文明から学ぶことにあると喝破し、逡巡する支配層に説得的に訴えかけていることである。

「期する所は五大洲の學術を兼備し、五大洲の長ずる所を集め、本邦をして永く全世界独立の国とならしむる基礎を世に弘めむ、と申す所に御眼力を注がれ候はば、仮令群小の批判等御座候とも、本より蚊蚋の羽音に均しき事、御掛念に及ばざる義と存じ奉候<sup>(19)</sup>」。

同じような内容は、「和蘭語彙出版に関する老中阿部正弘宛上書」(嘉永3年3月)にも盛られている。それによれば、「畢竟彼を能く知り候上にて己を比較し、其虚実強弱を考へ候に非れば、己を知り候事能はざる様存じ奉候」。ここには、外国にたいする勝利の決定的条件として、「夷夷諸国戦闘の仕組、和漢の制度との相違」について徹底的に研究することが必要であるという。外国と日本との戦術・戦闘上の差異として、安政5年4月、「ハリスとの折衝案に関する幕府宛上書稿」のなかで意見具申しているところは、象山の思想を窺う意味できわめて重要である。

安政4年10月21日、將軍に謁見した米国総領事ハリスは、老中堀田正睦と会談、12月より通商条約の協議をはじめ、翌安政5年1月交渉を妥結させた。幕府は、協商開始後、林輝・津田正路を、さらに安政5年2月には、堀田正睦を京都に送り、勅許を求めたが得られなかった。象山は、通商条約によって公使駐在を許容することに危惧を抱き、藩主の名において幕府に提出されるはずであったが、藩内の反対に会って果さず、結局、藩主の口上を添えて川路聖謨に送られたものであると

注(18) 「ハルマ出版に関する藩主宛上書」, 上掲書, 284頁。

(19) 上掲, 「藩主宛上書」, 前掲書, 287頁。

(20)  
いう。

これによれば、彼我の戦術・戦略上の面で克服しがたいともいえる格差についてふれ、植民地化の危険を指摘している。その場合、夷狄の観念が文明ヨーロッパという次元にまでたかめられたにもかかわらず、象山の意識が「開港＝自由な交易」という結論を導かず、依然として攘夷論の枠を出ることができないのは何故であろうか。ヨーロッパに力を以て対抗し、覇権を確立する以外に生き残れる途がないとし、そのために洋式による軍備の拡充が不可欠であることは、彼が力説するところである。しかし、ヨーロッパの学芸を学び、これによって国運の発展を期するとすれば、ヨーロッパ諸国との対等にして自由な精神的・物質的交流が前提とされなければならない。ところが象山の場合、その本末が顛倒され、鎖国が民族独立の重大な方策であるという観点が抜き難く貫いている。これは、鎖国を解いて自由な貿易体制に入るならば、アヘン戦争後の清国の例にみられるように、アヘンがわが国に輸入され、国家独立が危殆におとしいられるという憂慮からである。この文書の〔別紙〕には、「阿片の生民に大害ある事、心付け尤もに候所、英国には本邦と交易の道開け候へば、唐国同様追々阿片持渡り売弘め候志願のよし」と書かれている<sup>(21)</sup>。注目すべきことは、文明ヨーロッパの優れた側面と同時に、その醜惡な面をも容赦なく剔抉し暴露していることである。同じく〔別紙〕の冒頭において、つぎのように激越な論調で非難するのである。

「西洋諸国に於て、世界中一族一統に致し度欲し候は、天地公共之道理より出で、自国他国の隔なく生靈を愛育し、有無を交通し候はむ為の情願に出候事歟、但しは各国国々自己の利を営み、世界の利を納し候はむ為の邪慾に興り候事か、と尋ね申度。左候はば、彼必ず公共の道理より出候事と答へ申可候。其時、此方にて申度候は、去らば其方申立候筋、全くうけ難く候。其子細は唐国の人民、阿片の為に年々夥しく其害を受け候故に、唐国官府是を嚴禁候は、固よりしかあるべき道理に候。然るを英国にて自国の利益に相成候とて、和親を結び交通致し候国の嚴禁を犯し、人民の残害を顧みず、剩へ容易に手出し成難き程に其船に大砲等用意致し、嚴重の手配にて其兇奸を恣にし候由、其の不仁・不慈・無礼・無義、強盜の所為とも申す可候。……西洋諸国に於て、果して天地公共の道理を奉行し候はば、英国に決して此の無道はあるべからず<sup>(22)</sup>」。

まことに堂々たる文章ではなからうか。要するにイギリス帝国は、その交易による侵略的な政策を、天地公道として、有無相通ずる人類の普遍的道義をヴェイルとして利用するのみで、実際は、その経済的利益のために、「唯我国を恐嚇して、其の求むる所を叶へん」とする意図に出るものであるとする。そして、「英国には本邦と交易の道開け候へば、唐国同様追々阿片持渡り売弘め候志

注(20)「ハリスとの折衝案に関する幕府宛上書稿」, 上掲書, 291頁傍注参照。

(21) 上掲, 「幕府上書稿」, 上掲書, 297頁。

(22) 上掲, 「幕府上書稿」, 上掲書, 296頁。

願のよし」、大國の清國にしてすでに阿片を禁止することができなかつた以上、貿易を行えば日本もその轍を履むことは避けられないと主張し、自由貿易にたいして、専らその消極的な側面のみが強調されている。

ところがこれから4年たった文久2年9月の「時政に関する幕府宛上書稿」には、時勢のより切迫した状況と対外的危機の深刻化が反映して、幕府への政策具申としては、より具体的な論調と、貿易の効果ならびに西欧市民社会探索について興味深い論策を展開している。とき恰も、福沢もその一員である遣欧文久使節が派遣され、幕府の政策も、試行錯誤をくり返しながら、重大な転機を迎えていた。すなわち、文久2年6月、勅使大原重徳は島津久光に衝られて江戸へ下り、幕政改革の勅命を伝えた。これをうけて幕府は、7月に徳川慶喜を將軍後見職に、松平慶永を政事総裁に任命、幕政の改革にのり出した。島津久光は、この帰途8月、生変事件をひきおこし、幕府の危機は極度に深められるのである。それはさておき、この幕府宛上書稿は、内外の政治状況にかんがみ、幕府としてとるべき基本方針を論じたものであるが、またひとつには、安政の大獄以後処罰された者の赦免が行われたが、象山は忘れられていた。自分が忘れられてしまっているという不安が、この文を書く一つの動機となっているという。<sup>(23)</sup>

米国公使ハリスの駐在によって国交樹立をその方針として確定した幕府の政治的姿勢に非常な驚愕とともに危惧を感じた象山は、その前にまず、嘉永3年(1850年)3月、「和蘭語彙出版に関する老中阿部正弘宛上書」のなかで、西欧諸国に対抗して武威を張るためには、洋学を奨励する以外に方法がないと切言した一節、「拙者義も其節より心掛け、西洋の兵法火術之書等購ひ求め研究仕候に、果して其器械技術巧妙を極め、和漢古今未曾有の事ども少からず、是迄和漢兵家論じ定め候陣法戦術も、是が為に一変を経候はざれば、共に戦を成し難く候事」、「扱其長短得失を詳にし候には、西洋の原書を広く読み候に若くは御座無く、又世に善き翻訳書を多くし、実用を助け候にも、原書を読み候もの盛に之無くしては叶い難き義と存じ奉候」とのべて、伝統的に根強く幕末の為政者の心に癡固していた夷狄観を大幅に修正することを求めているが、さらに一步進んで、文久二年の「幕府宛上書稿」においては、西欧市民社会の実像にもふれて、本邦との差異を強調しているのが注目をひく。文久二年閏八月十五日、各藩、軍備充実のために諸経費節約を名目として、幕府は参観交替の制度を緩和する政策をうち出した。その結果、老中等重役登城の場合にも、「天下の御大勢も執ら為被れ候御方様の、御道具も御座なく、平士同様三騎五騎にて御登場遊ばさ被候」次第となった。<sup>(24)</sup>諸事儉約も必要であろうが、もし無駄を省くというのであれば、象山にとっては、そのような策よりも藩内に学問の気運を勃興させることこそ緊急であるという。<sup>(25)</sup>

注(23) 「時政に関する幕府宛上書稿」(文久2年9月)、上掲書、298頁、傍注参照。

(24) 「和蘭語彙出版に関する老中阿部正弘宛上書」(嘉永3年3月)、上掲書、289—290頁。

(25) 「時政に関する幕府宛上書稿」、上掲書、305頁。

「其上に御一法を設け為被れ、御供の衆、文武の志に従ひ、当用の書籍一両巻懐にし罷り在り、御供待の間無益の雑談相停め、懐中の書籍取出し、各独看仕候とも、又は志を共にし候者と互いに講習討論仕候とも、勝手次第に致し、或は測量砲兵等に預り候表譜の類持参、常に目に狎れ暗記仕候様相勤め、或は其間に肝煎様の者御取立、御世話御座候はば、御供に出候も、即ち学校出席仕候も同様にて、文武共一廉御家中の進みに相成り申す可……」<sup>(26)</sup>

しかし興味深いのは、象山が、文久二年、幕府の制度的変革後に伴う供番の減少が、日本に入ってきたハリス等外国人の慣習の影響をうけたものであるとすれば、それは日本と外国の相違を無視し、厳重な身分制度を守る皇国と外国とを混同するものであるという。その意味では洋学者象山は儒教、とりわけ朱子学の学問的思考から一步も出るものではなかった。<sup>(27)</sup>

「此非常御変革に際為被れ候御儀に付、成る可く丈の人減しは然る可き従事に御座候へ共、伝聞仕候次第にては余りに甚しく、恐れ乍ら御至当の義と申上難く存じ奉候。然らば、此節の御挙動、誠に何の御故とも察し奉兼ね候。若しくは亜米利加・欧羅巴諸国の大統領・執政、又は本邦へ渡来のミニストル等の貴人、外出に僅々の従僕を召連れ、多くの人数を要せず候義、御見聞及ば為被れ、面白き事に思召被れ、御本邦にても其風習にさせられ候方然る可くなど申す御事には御座なく候哉。若し自然左様の御儀にも候はば、恐れ乍ら寸木之本を撥らせられず候て、其末を岑樓と齊しくせさせられ候とも申上ぐ可く存じ奉候。いかにと御座候に、皇国と外蕃とは御国体本より同じからず、夫故に又御政体も異ならざる事を得ざる義と存じ奉候。彼国にては農工・商賈・舟子・漁師・獣医・傭夫の子と雖も、其才能學術優長にして、果して衆に出で候時は、登用してミニストルにも、執政にも、大統領にも至り候事に御座候。去れども、其職を罷め候へば、本貫の戻に帰り候故、其職に居り候時節使命に供し候は、多くは皆其国に属し候胥吏にして、其家事を弁じ候為の奴隷は僅々の事と相見え候」<sup>(28)</sup>

封建的な身分秩序の上に立つ日本と、これとは国体を異にして、どのような職業や階層の出身者でも、能力次第では国の統領の地位につくことができる西欧市民社会との比較を論じながら、象山は、両者の制度の差異、「国体政体の然らしむる所」のみを力説して、すぐれた学芸技術を生み出した西欧社会にたいする日本の立ち遅れというようには理解しなかった。ここに象山の独自の世界観とともに、同じく下層武階級に生まれながら西欧認識を異にする福沢論吉との間に、注目すべき対比を見出しうるのではなからうか。

注(26) 上掲、「幕府宛上書稿」, 上掲書, 306頁。

(27) この点にかんしては、植手通有『日本近代思想の形成』, 岩波書店, 1974, 「幕末における近代思想の胎動」に負うところが大きい。

(28) 上掲、「幕府宛上書稿」, 上掲書, 307頁。

(三)

福沢諭吉と佐久間象山が、対外的危機を前に年代的に重なり合うのは、安政5年から文久年間にかけてのことである。この年10月福沢は藩令により、奥平藩中屋敷において蘭学塾を開いたが、すでにその4月、佐久間は、「ハリスとの折衝案にかんする幕府宛上書稿」を起草している。そして福沢は、万延元年には、木村撰津守の従僕として咸臨丸で渡米し、さらに文久2年には、竹内下野守等を使節とするいわゆる遣欧使節の一員として渡欧し、貴重な体験を積んでいる。この年、象山は「時政に関する幕府宛上書稿」（文久2年9月）および「攘夷の策略に関する藩主宛答申書」（文久2年12月）を書いて憂国の情を吐露している。同じく蘭学者とはいっても、この時点では福沢はすでに英学に転換し、また彼の蘭学修業は象山のように砲術の研究に焦点があてられていたわけではない。生き立ちは、同じく下層武士階級でありながら、年齢の差異、社会的環境の相違などから、二人の歩んだ途は、決定的に異なるものであった。しかしそれにもかかわらず、二人が抱いた西ヨーロッパ認識には、奇妙にふれ合う部分と相反する側面が交錯している。象山は維新を見ることなく暗殺に斃れたけれども、福沢は、その幕末における西欧体験を基礎として、『西洋事情』、『学問のすゝめ』および『文明論之概略』などを出版し、啓蒙思想家として世論に深甚な影響をあたえた。公武合体の主唱者としての象山は、嘉永6年、アメリカ軍艦の来航に触発される以前から、いわゆる尊攘激派とはちがって、独特のナショナリズムを抱懐していた。それは、また福沢のもつナショナリズムとも異なるものであった。この点について追求してみよう。

『福翁自伝』のなかに渡米直後、彼がワシントンの子孫は如何になっているかを、米国人に訊ねる一節がある。

「<sup>わしんとん</sup>華盛頓の子孫には女がある筈だ、<sup>むすめ</sup>今如何して居るか知らないが、何でも誰かの内室になって居る容子だと如何にも冷淡な答で、何とも思て居らぬ。是れは不思議だ。勿論私も亜米利加は共和国、大統領は四年交替と云ふことは百も承知のことながら、華盛頓の子孫と云へば大変な者に違ひないと思ふたは、此方の脳中には源頼朝、徳川家康と云ふやうな考があつて、ソレから割出して聞いた所が、今の通りの答に驚いて、是れは不思議と思ふたことは今でも能く覚えてゐる。理学上の事に就ては少しも<sup>きも</sup>胆を<sup>つぎ</sup>潰すと云ふことはなかつたが、一方の社会上の事に就ては全く方向が付かなかつた」<sup>(29)</sup>。

これは、福沢がその当時、西欧市民社会についての無智を告白したものとして知られている。もちろん、『自伝』は、福沢の晩年に、当時を追懐してのべているもので、そこには多少の記憶ちがいや誇張があるとしてもやむをえないが、ともかくこの瞬間は彼の西洋認識の重要な一契機ではな

注(29) 『福翁自伝』岩波文庫、115—116頁。



かったろうか。しかしこの最初の渡米の際には、いわば見るもの、聴くものすべてが珍しく、驚嘆と好奇心を無際限に発動させることはあっても、象山のように日本の近代化の立ち遅れについては明確には自覚していなかったように思われる。福沢の西洋文明への驚嘆、その立ち遅れと植民地化の危険性を感ぜしめられたのは、文久2年、渡欧途上の香港および新嘉坡での体験に発する。<sup>(30)</sup>しかし福沢には、攘夷という思想は欠如しており、むしろ最初の渡米前後から幕藩体制の存続を前提として、開国そして近代化と文明開化を志向していたと思われ、その点、彼の思考の発展径路は象山より直線的であるような印象をうける。

福沢と佐久間とは、下層武士という出自の共通性ととも儒教的教育の影響が圧倒的であったことは明らかであるが、福沢には尊王という観点はみられない。これは何よりも中津の学風が水戸学あるいは頼山陽のような思想とまったく無縁な思想状況の支配下にあったからであるし、それどころか、頼山陽は無視されていたと思われる。亀井南冥の影響下にあった白石照山から漢書を学んだ福沢は、師の感化もあり、広瀬淡窓や頼山陽も信用しなかったという。<sup>(31)</sup>この点が、佐藤一斎の門に入り、朱子学の影響を濃厚にうけた象山との差異であった。しかも彼が、水戸学派との交流によって尊王攘夷論、偏狭な排外思想の影響をうけながら、これに一定の距離をおいて国家独立の思想に到達しえたのは、蘭学を学ぶことによってであったと思われる。だがそれにもかかわらず、階級的身分社会を前提とする封建的思想の呪縛から自由であることはできなかった。この点もまた福沢との比較で興味深い問題を提起する。

福沢と儒学との関係は、象山のそれとは全く対照的であったといえよう。封建的身分秩序を絶対視する儒教の徳目が、若き日の福沢の眼にどのように映じたか、それは明示的には語られていない。少なくとも教養としてあるいは知識として、古典に親しんだことは事実であろうが、漢学的素養が深まれば深まるほど、そのことが却って彼をして己れがおかれている体制にたいする批判の刃を磨かせることになったのではないか。その背景には、何といても立身の途を閉された下層武士階級の、しかも次男という事情があった。彼の儒学にたいする姿勢をうかがわせるに足るひとつの材料として、安政3年(1856年)、兄三之助の死後、家督相続者にさせられ、鬱積した感情に悶えながら、母の同感と理解のみを頼りに、財産処分をして借金の始末をつけ、再び緒方塾に復学する『自伝』<sup>(32)</sup>のなかで、1,500冊もの漢籍を、一部を除いてほとんど売却してしまう一節がある。これを読んでみると、福沢は、儒教によって代表される「忠義孝行」、「治国平天下」あるいは「経世済民」というような徳目あるいは思想からは、ほとんど影響をうけなかったように思われる。その理由のひとつは、彼が商人の町、大阪に生まれ育ったことと関係がある。福沢の父百助は、儒教主義の教育を信じ、みずから中津藩倉屋敷に勤務しながらも、「算盤を執て金の数を数へなければならぬ」ばか

注 (30) この点については『西航記』(岩波書店版『福沢諭吉全集』第十九巻)を参照。

(31) 上掲『福翁自伝』、23頁。

(32) 上掲『福翁自伝』、54頁。

### 幕末知識人の西欧認識

りか、「大阪の金持，加島屋，鴻ノ池というような者に交際して藩債の事を司どる役」であることに，自尊心を傷つけられるのを感じるほどの純粋に学者風の人物であった。「もう十歳ばかりになる兄と七，八歳になる姉などが手習をするには，倉屋敷の中に手習の師匠があって，其家には町家の子供も来る。其処でイロハニホヘトを数へるのは宜しいが，大阪の事だから九々の声を教える。二三が四，二三が六，これは当然の話である……」。百助はそうした町人のための教育に激怒したといわれるが，福沢が幼年時代垣間見た町人的教育は，実に彼の一生を決定的に支配したのである。漢学的素養と儒教教育は，福沢における合理主義の生成を何ら妨害するものとはならなかった。儒教がたんなる知識として，教養としてとどまり，思想として凝結しない限り，その上に築かれる洋学が封建制批判の有力な武器に容易に転化しうる可能性を秘めている。しかし象山の場合は，福沢とは対照的な径路を辿った。

象山は松代藩生え抜きの秀才として，天保4年（1833年）江戸へ遊学を許され，林家に入門し，天保7年までに佐藤一斎に師事した。同じく天保12年（1841年），君侯真田幸貫が老中となるに及んで，にわかに海防研究に従事することになり，翌天保13年，江川英龍に入門，間もなく，蘭学の必要を痛感し，弘化元年（1844年），黒川良安についてオランダ語の学習を開始するというように，藩の政策および幕政に加担する君侯の側近として重い役割を果さなければならなかった。彼が封建的身分秩序を絶対のものとして措定しなければならなかったのは，ある意味で当然であった。しかしそれでは，象山と諭吉とでは，その思想において，無関係であったかといえば，ある種の共通性，とくに民族独立の思想において，『学問のすゝめ』および『文明論之概略』は，象山をはじめとする幕末の思想家の遺産を濃厚に受けつぐものではないであろうか。

（未完）

（経済学部教授）